

生写朝顔話

真葛が原茶店の段

（三重）是非もなき。

『我が恋は、松を時雨の染めかねて』と、慈鎮和尚が詞の種、真葛が原の片辺り、風呂に常釜掛け床几、茶代一服一銭が店は風雅の捨て所

丸山戻り色酒の、酔ひを醒ましに来る客の、中に目染んだ京羽二重、見栄は作れど懐の、渋茶飲みある茶笥、逆立花桂庵とて、ヒより口のように廻る判官好みの弁慶医者、しかつべらしく出で来たり。

桂庵「イヤコレお由、今日は寿貞尼はどこへ往かれた」

お由「ハイ、お家様は大坂のお客で、正阿弥へ参られました」

桂庵「ム、風の神ではのうて正阿弥へ付け込まれたか」

それと見るより

桂庵「オ、イ、オ、イ、祐仙さん。先刻より白鷺が火事見る様に、首長うして待つてゐるに、さりとては恋路に不粹」

と言ふに

祐仙、腰打ち掛け、

祐仙「イヤモ、やつがれも心は急いたれど、よんどころなき朋友に出逢ひ、端の寮の書画の会、それから快々堂で下らぬ薄茶一服、漸う抜けてたつた今。まづ何はさて置き、兼ねて尊公に頼んだ秋月弓之助の娘、仲人せうと尊公の請け合ひ、即ち仕拵え料の三十両、ソレ、相渡す」

と出だせば

受け取り懐中し、

桂庵「イヤ慥かに落手仕る。先方にも承知なれど、こゝに一つの難儀といふは、先方は武家方故、医者を尊には取らぬ様子。元月心といふ出家が、宮城阿曾次郎といふ男を仲人せうと言ひ入れ、大抵二親の注文に

お由「ホ、ホ、ホ、また桂庵様の久しい口合ひ。お前はまたどこへお出でだえ」

桂庵「イヤ、下拙は八百八十軒の病家廻りを仕舞ひ、あまりほつとした故、お軽ぢやないが酔ひ醒まし、風に吹かれに罷り越した。それはともあれ、この店へ歳の頃は三十一二、色黒ででつくりと背の低いお医者

が、下拙を尋ねにはわせなんだか」

お由「イ、エ、そんなお方は見えませなんだ」

桂庵「ハテナア、もう来さうなものぢやが。ア、アレ、向こうから来るがそうぢや。イヤコレおよぼ、あの仁とちと内証の話もあれば、そもじは暫く勝手

へ」

お由「アイく合点でござんす。用があるなら手を叩いて下さんせ」

とお由は勝手へ入りにける。

桂庵「テ埒の明かぬ歩き様」

と見遣る

向こうへ萩の祐仙、

は合ふたが、下拙はかの秋月へ立ち入りする故、『どうぞ阿曾次郎の人品、国所を聞き合はしてくれ』との頼み。コレ、尊公の恋の叶ふ前表なり」

祐仙「したり」

桂庵「しかるところ、かの阿曾次郎は色白く厚鬚の当世男、尊公は惣髮。この一条に下拙も色々心を砕き罷りあるてや」

祐仙「エ、エ、エ、それがなんの心を砕くこと。あの娘故なら、元服はおるか坊主に成つても苦しい。自他とも仲人頼み入る」

桂庵「ム、そんなら貴公には、前髪を剃り落とし、元服をなされますか」

祐仙「オイノ」

桂庵「ヤこりやえらいはハ、ハ、ハ。しからは祇園辺の髪結床で急に元服」

祐仙「オ、合点、合点」

と祐仙は、恋に上擦り気もそゞろ、床屋を差してぞ走り行く。

後に桂庵、思案顔、

桂庵「マア三十両は着服したが、もそつと彼奴を摺り下ろす妙計がありそなもの」

と、もくろむ折しも

下女お由、鍋を片手に立ち出づれば、

桂庵目早く、

桂庵「オ、こゝゝお由え、ちよつと、ちよつとこゝゝへおぢや。ナントその鍋、おれに売つてくれまいか」

お由「滅相な、これは内の菜鍋。しかし値打ち次第で売日もせう、がなんぼに買ふてぢやえ」

桂庵「ム、そうぢやな。張り込んで銀一つに買おうか

い」

お由「滅相な」

桂庵「そんなら二朱、二朱」

お由「イエ、く、もそつと買ふた」

桂庵「エ、そんならつぼの皮、一步、一步」

お由「ムウ、一步なら負けてもあげよ。がこの鍋買ふて何にさんす」

お由「ハテ、何にせうとも細工は流々、仕上げを御覽

じ」

と、小柄を抜いて白紙へ、穴の開く程鍋炭こそげ、手早く紙に押し包み。

桂庵「これでよしこれでよし。サア一步、必ずこのこと他言無用。ア、コゝゝ、また外に頼む子細、高うは言はれぬ、コレ、かうく」

と耳に口、

お由「ムウ、そんならその鍋炭を振り掛けたら、惚れた振り」

桂庵「こりや、声高し。内に忍んで良い時分に、首尾よういたら、また一步」

と、頷き合ふて

下女お由、とつかは内に入りにつけり。

剃り立て頭のコレマ鳥毛立ち、伸びた鼻毛を抜き出しの、鬚よりたらしく脂汗、息急ぎ戻る萩の祐仙、

桂庵見るより煽き立て、

桂庵「イヤ似合ふたりく。とんと歌舞伎役者そつく

りぢやハゝゝゝ。したが、少しの難は、鼻が獅子舞

ひ目が下り目、これはつかりが、ア、玉に疵」

祐仙「ムウ、ひよつとかのお娘が嫌ひはせまいか」

桂庵「オツト、そこらは抜からぬ。下拙が家伝の惚れ

薬、即ちこゝに所持致す」

祐仙「ナニ、それが惚れ薬とな」

桂庵「なかく。海に千年山に千年、三千年功を経しいもりの黒焼き。この薬をパツく」と振り掛けると、

小野の小町の様な堅造でも、ずるくべつたり惚れるが妙。しかし代金は十五両、お望みなら手に入れませうか」

祐仙「イヤモ、お娘の惚れるに違ひなくば、十五両が二

十両でも入用即ち、これに十五両」

桂庵「ム、さらば差し上げのしたし物」

と、鍋炭渡し金受け取り、合図の咳、咳、咳、

『それ』とお由が汲んで出る、目元の塩茶差し出だせ

ば、

祐仙は『これ幸ひ、惚れ薬の試み』と、振り掛けられて

お由はうつとり、

お由「オ、いつの間にもやらい殿御にお成りだえ。首筋元からぞつとして、わしや恋風を、ハゝゝハクシヨ

ン、引いたそうな」

と、傍へ寄り添ひ

祐仙が、太股ふつゝり、

祐仙「アイタ、アイタ、ア、こりやなんとする」

お由「エ、なんぢやいな。なんとすると下心の悪い。

目元なら鼻付きなら、どこに一つの惚れ気のある、あた好きらしい」

と、凭れしは、達磨人形に野良猫の、しなだれ付きし如くなり。

祐仙は『薬の効き目』と、一途に思ふ悦び顔、

祐仙「テ妙薬もあればあるもの、オホゝゝゝ。ついに

女子に斯様なこと、臍の緒切つて覚えぬやつがれ」

お由「なんぢやいな。人になつかり気を持たせ、薬の話聞きとうない。内太股がうそついて堪へられぬ」

と抱き付く、

浅香「オ、それは風邪を引かしやつたのである。しかも恋風といふ重い風邪を」

深雪「ヤア、そんならそなた知つてゐやるか」

浅香「オ、知らないでなんとしませうぞいの。楓に薄々聞いた上、お前の居間にあつた扇、歌の唱歌は朝顔、手跡は宮城阿曾次郎殿」

深雪「エ、」

朝顔「サなんと違ひはござんすまいがな。その阿曾次郎殿を恋ひ焦れ、それ故の物案じと、私はとうから知つてゐます。がこれ、お案じ遊ばすな。お前に言ふて悦ばすことがある」

と、言ふに

深雪は傍に寄り、

深雪「ム、わしに悦ばすことゝはえ」

浅香「サア、外でもない。今日お前に賀さんがござる筈。なんと嬉しいかえ」

深雪「ヤア、わしの賀とは、そりや何人。わしやそんなこと聞きたうない。言ひ出してもたもんな」

と、捻ぢ向く素振りを
つくづく見て、

浅香「ホ、ハ、ハ、ハ、訳も聞かずにそりや何事。出入りの医者桂庵殿の仲人で、来る賀がねは宮城阿曾次郎殿」と聞いて深雪は二度びつくり、

深雪「ヤア、阿曾次郎さんがござんすとは、そりや本のことかいのう」

浅香「オ、なんのわしが嘘言ひませう。がかう言ふ内も心が急ぐ」

深雪「オ、それ、そんなら髪も結ひ直し、小袖も相談。サア、来てたもやいの」

と手を引つ立て、悦び勇み納戸口、暖簾の

内へぞ、入りにける。

かくてその日も昼過ぎて、隙行く駒のそれならで、岡崎の隠れ家を、訪ねてこゝに来る人は、肩から爪の立花桂庵、

似た山賀の祐仙を、

桂庵「こぢや、こぢや」

と手招けば、

鳥屋の戸開けてちやぼ鳥の、米見付けたる風情にて、パツパツと鍋炭を、撒き散らしつゝ出で来たり。

祐仙「ア、深雪殿のお屋敷はもうこゝかえ。おりや、

ア、恥づかしい」

と鼻かめば。

桂庵「エ、そんな初心なことでは埒が明かぬ。道々も言ふ通り、宮城阿曾次郎を忘れまいぞ」

と言ひ付け置いて門の口

桂庵「頼みませう、頼みませう」

と訪へば、

襷外さず飛んで出ず、納戸の内より下女のりん、

りん「どつれ」

と言ふも不精なり。

桂庵「イヤ、立花桂庵、お見舞ひ」

りん「エ、誰ぢやと思ふたら桂庵さん、びつくりしたが
の」

桂庵「オ、道理々々。顔を見たら猶びつくりせう。イヤ、弓之助殿へ下拙が宮城阿曾次郎殿を同道致した、とサア伝へられて下されう」

と、言ふに

おりんが心得て、その儘奥へ走り行く。
下女が知らせに弓之助、衣服改め提げ刀、

操伴ひ一間を立ち出で、

弓助「これは、桂庵老、大儀々々。宮城氏を同道とや。早速に対面したし、いざ、これへ」

に表へ出で、

桂庵「萩の氏、ア、イヤ、宮城氏、いざお通り」としかつべ顔。

返事をなんと祐仙が、今更どうか閤高く、うちくもぢく入り兼ねるを、

無理に引つ張り連れて入る。

操は呆れて不審顔、

『様子あらん』と弓之助、

弓助「ナニ桂庵老、宮城氏はいづれにござるな」

桂庵「エ、即ちお目通りに控えられます」

弓助「ム、ア、その仁が宮城阿曾次郎殿とや」

桂庵「いかにもく、正真取り取りぬくくの。阿曾次郎殿、それ宮城氏、御挨拶」

と、言へば

祐仙、扇をばちく、

祐仙「エ、いかにもやつがれが萩の」

桂庵「エヘン、エヘン」

祐仙「イヤ宮城阿曾次郎でござる。この度は不思議の御縁で、御息女の躰に成し下されうとのこと、聞くところの儘病家も打ち捨て」

桂庵「ア、コレく、聲舅初めての対面に、あんまり詞が多過ぎる」

弓助「ア、桂庵、苦しくないく。シテ宮城氏には、娘深雪を知つてゐる召さるか」

祐仙「イヤもうく知つた段ではござらぬ。エ、いっぞや当所清水寺、地主権現の花盛り、かの薄雪紛ひのぼつとり者、花の帽子に花の櫛、花の姿の華やかさ。

首筋元からぞつとして、見取れる内に早や下向。下向

せうとてお姿を、目には眺めはせぬものを、残り多さに見え隠れ、この岡崎まで付ひて来て、親御の苗字お娘の名まで、聞き合はす程の心底男。聳入りしたら朝寝せず、水も汲んだり飯も焚く、安摩弦癖鍼の療治、料物あらずに仕らう」

と、喋る度々

桂庵は、消えも入るべき術なさに、冷汗流すばかりなり。

操は小腹立ちながら、『躰つてみん』と打ち微笑み、

操「これはく、不束な娘をそれ程までに御執心ならば、いかにも縁組致そうが、この方は諸芸師範の家柄、詩歌、俳諧、香、茶の湯、そのお心掛けがござりまするか」

祐仙「イヤモあるともく。エ、歌はかの、九は病

ひ、五七は雨に四つ日照り、六つ八つなればいつも大

風

操「イヤ申し、そりや地震の歌ぢやござりませぬか」

たゞ一打ち」

と刀の柄、

二人「こりやたまらぬ」

と祐仙

桂庵、命からく逃げ帰る。

弓之助は苦笑ひ、

弓助「ハ、ハ、ハ、ハテサテ、世には虚けた奴もあればあるもの。たはいなし目に掛かつてほとと退屈。どれ

一休み」

と立ち上がれば、

操も共に煙草盆、提げて一間へ入りにけり。寝ぐたれの、髻の後は解きながら、纏ると思ひくしくくと、深雪が胸の乱れ髪、誰に言ふべき方もなく、涙に袖も濡れ縁の、朝顔の花打ち眺め、

祐仙「滅相なくく、全く左様な者ならず。紛ひなし正真の阿曾次郎」
弓助「ヤア吐かすな。一目見るより売僧者とは見て取れど、様子あらんと窺ふ某、長居せば手は見せぬ。

我が袖に、涙の露の干ぬ間なき、嘆きせよとの歌占か。宇治の蛸となるならば、あくがれ出でて夫の傍、飛んで行きたい顔見たい」

と、形見の扇身に添えて、抱き締めくく忍び泣き、日影待つ間の朝顔の、雨に萎るゝ風情なり。

後ろに立ち聞く乳母浅香、それぞと察し立ち寄つて、

浅香「これ申し深雪様、桂庵殿の粗忽故、阿呆らしい今の時宜、辛気なは道理々々。したがお氣遣ひ遊ばす

な。この浅香が奥様へお話し申し、阿曾次郎殿にきつとお添はせ申しませう。くよくく思ふて病氣やなど出たら、親御様へ大きな不孝。氣をしゃんと取り直し、縁と月日を待つが肝心。マアく奥へ」

と諫められ、

少しは心晴れかけし、夕日照り添ふ蔦紅葉、顔赤らめて入りにけり。

折から表へ慌しく、急ぎに急いで駆け来る武士、訪ふ間もなくずつと入り、

勇藏「秋月弓之助殿、御在宿か」

れ。我れはこの儘国元へ、心も急げば」

と言ひ捨て、元来し道へ引つ返す。

弓之助は大いに驚き、状押し開き読み下し、

弓助「真に殿の御自筆、先非を悔ひしお頼みの文体、

ハ、勿体なく。主家の大乱見捨てん様なし。ヤア

く女房、娘も帰国の用意せよ。ナニ、関助参れ」

の詞の下、

『ハッ』と答へて駆け出る奴、

関助「お旦那、何の御用でござります」

弓助「オ、火急に国元よりお召しの御状到来せり。今

日中に家内を片付け、今夜すぐさま伏見まで発足せ

ん。心得たるか」

と言ひ渡し、奥を差してぞ駆け入つたり。

俄かの帰国に騒ぎ立ち、氣も苛々と関助が、『何からせ

ん』と心の悶着。

かくとも知らず阿曾次郎、帰国の暇余所ながら、深雪

に一目逢ひの戸を、それともさすが開け兼ねしが、思ひ

切つてそつと入り、

と呼ばはつて、尻居にどうと倒るゝ息切れ。

『何事やらん』と弓之助、押つ取り刀に走り出で、見れば覚えの古朋輩、柄杓押つ取り用意の氣付け、口に含ませ氣転の活け、

勇藏「ヤア弓之助殿」

弓助「ホウ、貴殿は瓜生主水が舎弟、勇藏ならずや。慌たゞしき体心得ず。子細はいかに、様子はなんと、なんと」

と呼ばはれば、

『ハッ』と心を取り直し、

勇藏「されば候、国元にはお蘭の方の威光を借り、成り上がりの芦柄伝蔵、御前良き儘下々へ過役を掛け、金銀を貪りしより事起こり、御領内の民百姓、一揆を起こし我れ一と、袖が浦の城郭へ押し寄せく追つ取り巻き、無二無三に攻め立つる。さるによつてお家の騒動大方ならず、早や大乱に及ばん氣色。この騒動を鎮めん者、弓之助より外になし。主君の後頼みの御状、片時も早く帰国あつて、賢慮を巡らしお鎮めあ

阿曾「頼みませう」

と訪へば

関助「エ、この忙しいに何者ぢや」

阿曾「ア、イヤ、宮城阿曾次郎と申す者」

半分聞かず、

関助「ヤアまた失せたか、大馬鹿者」

と夕暮れ時、顔さへ見ずに突き出だし、戸を立て切りし人違へ。

様子知らねば阿曾次郎、合点のいかぬ内の体、いぶかしながら差し覗く、物の文色の暗紛れ、心残して出でて行く、後の嘆きの種ぞとは、知らず知られず

弓之助屋敷の段

三重 わりなけれ。

ここに芸州岸戸の家臣、秋月弓之助が一構え、生得風流文武に秀で人に優れし武士の、都に蟄居しありけるが、国の乱れに召し帰され、殿の仰せを承り事治まりしその後は、昔に勝る返り咲き、いと美々しくも輝けり。

家の接ぎ木の一人娘、今は蒼の愛盛り、国へ帰りしその日より、たゞぶらくと物思ひ、**腰元**、**端女**召し連れ、一間の内より立ち出づれば、中に**早枝**がしやくくり出で、

早枝「申し**深雪**様、この節はぶらくと物思はしいお顔持ち。ちとお気でもお晴らしなれませぬかいな」

深雪「オ、よう言ふてたもつた。思ひ内にあればぢやはいの。いつぞや明石で本意ない別れ。辛気なことではないかいの」

と心の内に口説き泣き、女心の一筋に思ひ遣る瀬も道理なり。

早枝「オ、何をくよくよ思し召す。旦那様のお帰りに間もあるまい。ここにお出でなされてはお氣結ばれ。これから奥の離れ座敷へお越し遊ばし、琴の組もお慰みに」

深雪「オ、そんならそうしやうはいの」と、**腰元**共に誘はれ、一間の内に入りにけり。

かゝる折から表には**秋月弓之助**、常に変はつていそくと、立ち帰る我が家の内、かくと知らせに妻**操**、一間の内より立ち出でて、

操「これはくお早いお下がり。御前の首尾は如何でござります」

と手を突けば、

弓之助、打ち微笑み、

弓助「イヤモ、お悦び召され。御前表は上首尾。この度、国元の一揆相鎮めし事、殿には、イヤモ殊の外のお悦喜。しかるところ、時分の来たる娘**深雪**に、この

と、心の悦びしづくくと、奥の

ヲクシ 一間に入りにけり。

後に**操**はとやかくと、娘の心計り兼ね、千々の思案に暮れ告ぐる、柱時計の音さへも、胸にどきつく物案じ、差し俯いてゐたりしが、**煙管**相手の独り言、

操「今夫のお詞では、お上の御意の掛かつた縁組、娘思ひの我が夫が見極めての言ひ約束。粗相のあらう様はなけれど、たゞ案じるは娘がごと。いつぞや宇治の

蛸狩りに見初めた人は宮城阿曾次郎殿とやらと**腰元**共が噂。どうぞ元の阿曾次郎殿の行方を尋ね、娘に添はせうと思ふ矢先。差し掛かゝつた縁結び、一旦夫が御前にてお受け申した上からは、今更どうも**変替**ならず。娘に訳を言ひ聞かせ得心さすが上分別。そうぢや、そうぢや」

と打ち領き、一間の方へ差し寄つて。

操「娘、娘」

と呼ぶ声に

度、殿より仲人下され大内家の家臣、駒沢次郎左衛門と申す者、文武有学は申すに及ばず、天晴れなる若者、『**深雪**の簪に致せよ』と、モ、有難き御仰せ。一家中の手前、イヤモ、面目これに過ぎず」

と、詞に

操、擦り寄つて、

深雪「すりや殿様のお仲人で」

弓助「オ、サ、御前よりお眼鏡を以ての簪なれば、おこともさぞや満足ならん」

と、父の悦び

母親は、娘の心を思ひ遣り、明けて言はれぬこの場の思ひ。

操「イヤ申し、それはあんまり早却な。娘にとくと言ひ聞かせたその上で」

弓助「イヤサ、某もその気の付かざるにてはなけれど、も、殿の仰せ是非に及ばず、娘にもとくと言ひ聞かせ、吉日を選び祝言の拵え。某は暫時休息致さう。その方、良きに計らひ召され」

深雪「アイ」

と答へて娘の深雪、居間の襖を開け立てゝも、身は恋ひ瘦せて気力なく、風の柳の打ち萎れ、思ひありげに座に着けば。

母はいつよりほやく顔、

操「オ、娘、今日はいよいよ顔持ちも良さそうで、ママ嬉しい。今呼んだは、ちとそなたに言ひ聞かさねばならぬこと、一通り聞いてたも。この度お国の騒動、

『立ち帰つて乱を鎮めよ』との主命。是非なく夫には帰国あり、事を無事に治めし功にて、先知の上に三百石の御加増、その大恩あるお主のお仲人にて、大内の家中駒沢次郎左衛門といふ立派な武士を我が身の躰にせよとの仰せ」

深雪「エ、」

操「オ、驚きは尤も。が、こゝをとつくとう聞きや。よくく器量骨柄も気に入つての上のこと。この頃我が身を見るに付け、痩せ衰ふは京にて思ひ初めた恋人故、と母が見た目は違ふまい。その主へ貞節に外

の夫は持つまいと、思ふは女子の道なれども、一旦夫

が御前にてお請け申したその縁組。もし得心してたらぬと、夫は御前へ言ひ訳立たず。コレ、腹を切らねばならぬぞや。こゝの道理を弁へて得心してたも、コレ娘、母が手を下げ頼むぞ」

と、詞を尽くし理を分けて、母の頼みを聞く深雪、なんと返事も泣くばかり、暫し涙に暮れられたり。

操「ム、これ程言ふても聞き入れずば、親の最期も厭はぬ気ぢやの。ハテ、なんとせう、夫の生害見ぬ先に母は自害」

と座を占めて、用意の懐剣抜き放てば、娘は慌て縋り止め、

深雪「ママく待つて下さりませく。事を分けてのお詞を如何にも得心致しました。嫁入りを致しますはいな」

と立派に言へど胸の内、袖に涙を押し包む心ぞ思ひ遣られたり。

操

「オ、よう言ふてたもつた、よう言ふてたもつたのう。その一言を聞く上は、一時も早う夫のお心も休めませう。これく、そなたも居間でママ休みや」

と娘の心白紙の、障子引き立て入りにけり。

娘は後を見送りにて、

深雪「母様の今のお詞、無足にするではなけれども、聞こへませぬ父上様。私に心にどの様な願ひ望みがあるぞども、知らずにひよんな嫁入りの言ひ約束は何事ぞ。今、母様の段々と事を分けたる御異見は、無理とはさらく思はねど、宇治の川辺の蚩狩り、ふつと見初めた阿曾次郎様、急な別れのその上に、明石の浦の月明かり、廻り逢ふ間も情けない。よくく薄い悪縁と、思ひ諦め死に覚悟。堪忍して」

とばかりにて、三筋四筋の義理の糸、乱るゝ髪の毛の涙、また伏し沈むばかりなり。

漸うに顔を上げ、

深雪「ア、我れながら未練なり。生きて貞女を破らんより、死んで未来の契りを待たん。せめては後の言ひ

の夫は持つまいと、思ふは女子の道なれども、一旦夫

が御前にてお請け申したその縁組。もし得心してたらぬと、夫は御前へ言ひ訳立たず。コレ、腹を切らねばならぬぞや。こゝの道理を弁へて得心してたも、コレ娘、母が手を下げ頼むぞ」

と、詞を尽くし理を分けて、母の頼みを聞く深雪、なんと返事も泣くばかり、暫し涙に暮れられたり。

操「ム、これ程言ふても聞き入れずば、親の最期も厭はぬ気ぢやの。ハテ、なんとせう、夫の生害見ぬ先に母は自害」

と座を占めて、用意の懐剣抜き放てば、娘は慌て縋り止め、

深雪「ママく待つて下さりませく。事を分けてのお詞を如何にも得心致しました。嫁入りを致しますはいな」

と立派に言へど胸の内、袖に涙を押し包む心ぞ思ひ遣られたり。

訳

と、泣くく料紙取り出だし、嘆きの種を書き置く筆の歩みさへ、更け行く空の封じ、風も身に沁む折からに。

弓助「娘、娘」

と父の声、

『見付けられじ』と庭の面、心は先へ飛石伝ひ、行方も知らず落ちて行く。

かくとも知らず弓之助、手燭携へ奥より立ち出で、

弓助「娘はぬぬか、深雪、深雪」

と言ひつゝ見廻す行灯の傍、『怪しの一通、心得ず』と手に取り上げて、

弓助「なんぢや、『書置の事』、ヤア、こりや娘が手書き、エ、さりととはく思ひもよらぬ。こりやく乳母は居らぬか、奥、操」

と、呼はるる声に

駆け出る操、

乳母の浅香も立ち出づれば、

弓助「こりやく奥、娘が欠け落ちを致したはい」

操 「エ、そりやマア本のことはいな
と、うろくくするこそ道理なる。

秋月は声高く、

弓助 「ヤア、早く参れ」
と呼ばはる声に

関助は、白洲へ立ち出で手を突けば、

弓助 「こりやく、関助、娘深雪が家出致した。身を投
げんもはかられず、早々追ひ付き、有無を言はず連
れ帰れ」

関助 「エ、そりやでつかちねえ大騒ぎ。例へ糸様足早
く、唐天竺までまでござるとも、脛に覚えのこの関
助、一時三里追ひ付いて、やんがて御帰宅させ申さ
ん。早やお暇」

と立ち出づる、気は張弓はりゆみの月夜影、忠義一途の関助は、
後を慕ふて

(2026. 4. 20)